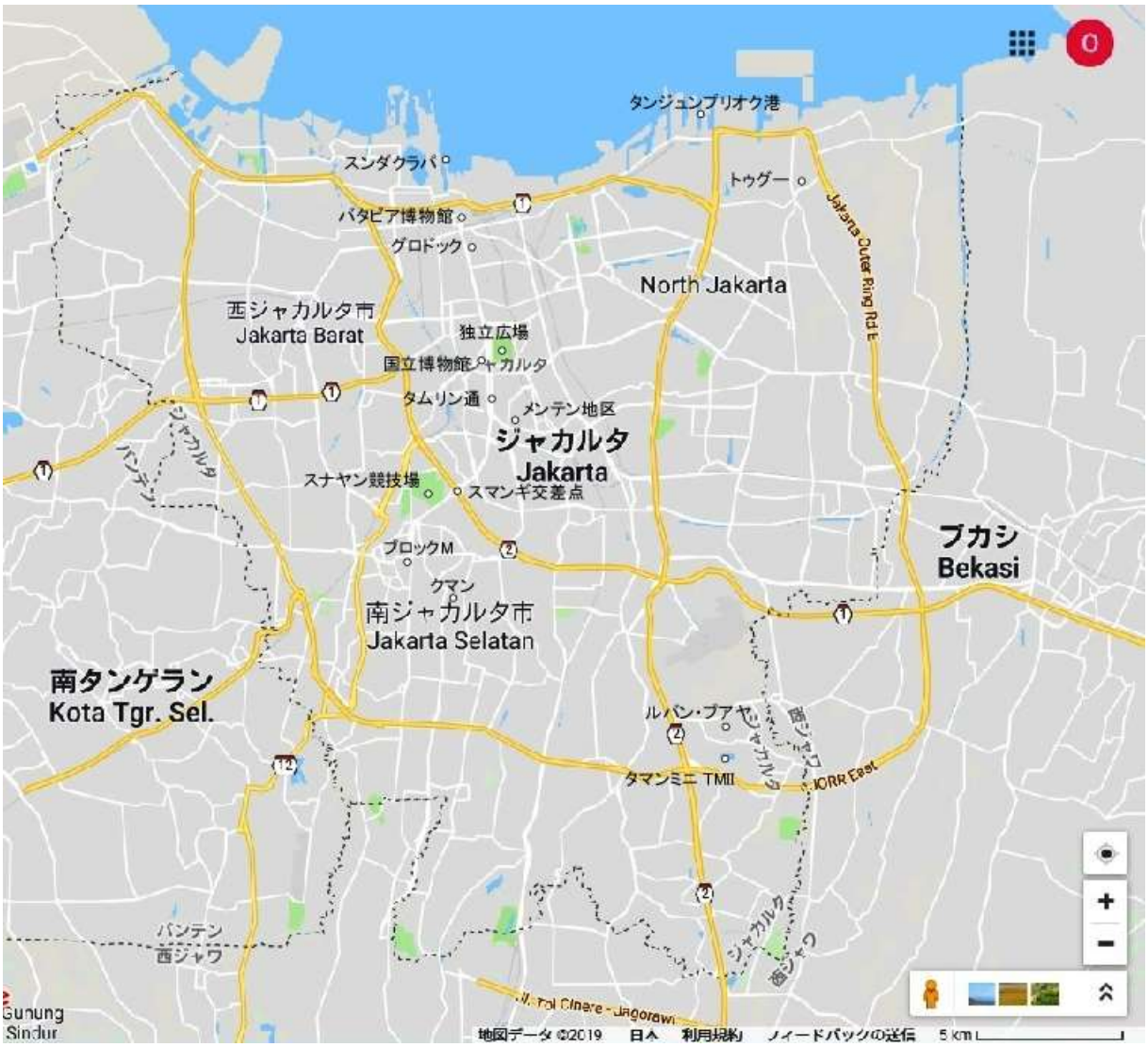
Ｂ－５　ジャカルタ

１５２．首都ジャカルタ



インドネシア共和国のイブコタ・ヌグリ（Ibukota Negeri＝首都）である「ジャカルタ（Jakarta）市」はジャワ島の西部にありジャワ海に面している。熱帯にある東南アジア最大の都市である。海抜８㍍、年間雨量 1755mm で雨季と乾季がある。平均気温 27℃で年間を通してほとんど変化はない。

ジャカルタの前身のバタビアがオランダ東インド会社（VOC）(→272)によって街が建設された当初はスルタン・アグン王(→337)の率いるマタラム王国軍に包囲された恐怖からスンダ人やジャワ人など地元住民は警戒されて町への居住は許されなかった。

その後、オランダ領東インドの牙城（がじょう）としてインドネシア全領土に対する植民地支配の拠点となった。インドネシア人にとってバタビアは屈辱のシンボルとも言える。

インドネシアが独立した際に新首都をカリマンタン島に新設するアイディアもあったらしいが、現実問題としてジャカルタを首都とせざるをえなかった。インドネシアは 350 年かかってオランダからバタビアを取り戻し、インドネシア名のジャカルタに改名した。通り名もオランダ時代の名称は全てインドネシア名に変更された。

ジャカルタはオランダ植民地時代から統治の中心として発展したため、住民はインドネシア各地からの移住者によって構成されている。本来のインドネシア人以外に植民地時代のヨーロッパ人、中国人、アラビア人、インド人など移住者の血を引く居住者も多い。このようなジャカルタの民族構成からバタビア人(→686)の都市ともいわれた。

インドネシアの他の都市のような特定の民族の色彩は全然ないという点からインドネシアの首都としての中立性がある。インドネシア語(→956)が市民の日常語として話される都市である。ジャカルタの所在地はジャワ島では西に片寄って見えるが、スマトラ島のウェイトを勘案すると首都としては好位置である。また、ASEAN(→012)の事務局の所在地として東南アジアの中心でもある。

海岸の要塞がジャカルタの起源であり、VOC 時代はコタが都心であったが、次第に南部の内陸部へ拡がり、１９世紀にオランダ領東インドを統治する政庁はムルデカ広場近辺に建設され、今日も官公庁街として機能している。しかし現在の都心はさらに南の黄金の三角地帯(→162)に移っている。

ジャカルタの周辺部を併せると 1500 万人の東南アジア最大の都市である。しかも一極集中化現象によりジャカルタの膨張はすさまじいばかりである。郊外に中産階級用住宅地や工業団地が拓かれ、ジャカルタ都市圏は行政の境界を越えて拡大し、隣接する西部ジャワ州の市・県を併せてジャボタベック(→169)といわれる。近年になってようやく都心の人口は停滞傾向が表れ、ドーナツ現象が見られるようになった。

１５３．ジャカルタの由来

チリウン河口にスンダ･クラパ（Sunda Kelapa）というパジャジャラン王国(→260)の外港があった。これが今日のジャカルタの出発点である。1522 年にスンダ･クラパはポルトガル(→270)と交易協定を行った。

その後、勢力を増してきたイスラム教のバンテン王国(→261)はムスリムのリーダーであるファタヒラ（Fatahilla）[1]をスンダ･クラパに派遣した。フファタァヒラの率いる軍はポルトガル船がきた際に追い払った。1527 年 6 月 22 日のこととされている。この勝利を記念してスンダ･クラパはジャヤカルタ（Jayakarta）と改名され、この日をジャカルタ創建の日として、例年お祭が催される。ただしこの説は史実からは疑問らしい。ジャヤカルタとは“偉大なる町”という意味である、訛ってジャカトラといわれた。

当時ジャワ島ではバンテン王国が繁栄しており、ヨーロッパ、中国など外国の商船はバンテン港に集まった。ポルトガルに続いてやってきたオタンダ東インド会社 VOC(→272)はバンテン王国の干渉から逃れるために、別の拠点を探した。

ジャカトラはバンテン王国から派遣された領主が支配する港市であったが、バンテンから自立したがっていた。オランダはジャカトラの領主に接近して、倉庫を建てる許可を得た。1610 年、許可されたのは 90m 四方の土地である。倉庫といいながら実は石作りの建物を建ててジャカトラを VOC の根拠地とした。

1618 年に VOC の総督にクーン(→336)が就任した頃、VOC とバンテン王国は対立し、ライバルの

[1] ファタヒラについてはスナン･グヌンジャティという説もあったが、スナン･グヌンジャティの娘婿ファーディラ･ハーンらしい。

英国との関係も悪化していた。VOC が敵という共通利害から英国とバンテン王国は連合して VOC のバタビア商館を攻めた。

交易のライバルに敵視される中で、VOC は要塞を築きジャカトラを強化し、1621 年にバタビア城と名づけた。バタビアはオランダの先住民のラテン語読みバタウィ（Batavi）にちなむ。

一方、中部ジャワから起こりジャワを席巻(せっけん)したマタラム王国のスルタン･アグン王(→337)はジャワ島に異教徒の要塞があることに我慢ならなかった。大軍を率いてバタビア城を包囲し後一歩で陥落というところまで追い込んだが、撤兵を余儀なくされた。

かろうじて難を逃れたバタビア城は、その後は商船の来航する港として繁栄し、VOC の中枢となり、後にオランダ領東インド(→275)の首都となる。結果的にバタビア城はオランダによってジャワ島に打ち込まれた楔(くさび)であった。

1920 年代の民族主義運動の盛り上がりとともにバタビアの名に代えて古名のジャヤカルタにちなみジャカルタという名が囁かれるようになった。1942 年、太平洋戦争で日本軍がジャワ島を占領した際にバタビアはジャカルタに改名された。

第二次世界大戦後、オランダが戻ってきて再びバタビアに戻そうとしたが、インドネシアの独立によりジャカルタとなり今日に至っている。

１５４．バタビア市庁舎

コタにある「ジャカルタ市立歴史博物館（Museum Sejarah Jakarta）」がバタビア博物館ともいわれる。1710 年にオランダ東インド会社（VOC）の拠点として建設され、後のバタビア市庁舎の建物を転用したからである。

周りの街並みと同様に建物も老朽化している。その上、手入れが悪いようでうす汚い。日本ならば“明治村”行きの代物(しろもの)である。しかし石作りの基礎の部分は頑丈(がんじょう)にできている。

市庁舎の床下は犯罪者を収容する“牢獄”になっている。狭くて暗いこと、その上、足枷に使われたというボーリング球状の錆びた鉄玉の展示は中世の雰囲気を漂わせている。地下の水牢は暗くて慣れるまでは何も見えない。

この牢に入れられたのは民族主義者の政治犯と思いがちであるが、民族主義者は２０世紀以降であり、実際に収容されたのは経済犯である。生きて帰る確率の少ない牢獄と罰金の二者択一を迫れば罰金の取り立ては順調にいくというオランダ的発想である。これでもあえて罰金より牢獄を選ぶのは華僑くらいであった。確かに華僑には他の民族と比べ生きて帰る者が多いというしぶとさがあった。

何れにせよこの建物は囚人の数がこの牢獄で間に合う程度の時代に作られた。建物の前の広場では絞首刑も執行され、為政者は建物の窓から見物した。植民地支配の本格化により市庁舎の地下牢獄では所詮追い付かなくなり、全土に刑務所が建設された。植民地統治のための重要な施設である刑務所は町の中心地にあるのが普通である。

当初の政治犯はセイロンやケープタウンなど VOC の支配地へ流刑にされた。民族主義者という政治犯がインドネシアの大地から次から次と現われたため、ニューギニア島のタナメラ(→242)に数千人

を収容できる流刑地を設けた。大物の政治犯は広い領土のあちこちの島に分散して流刑にした。ちなみにスカルノ大統領は投獄、流刑を併せて 10 年以上になる。他の民族主義者も負けず劣らずである。

バタビア市庁舎は建物自体が歴史的意味を持つものである。建物内の植民地時代の風俗の展示があるが、暑いから早く切り上げたいというのが実感である。冷房のない時代には最高権力者といえど風通しの悪いこの建物のこの暑さの中で耐えねばならなかった。

建物の外に展示してある“大砲”は由緒あるものである。大砲としては実用にならない古いものであるが、ただ砲筒の端に指を握って親指だけを出した浮き彫りがある。砲筒であるだけに猥褻(わいせつ)のサインにも見える。そのせいかどうかこの大砲は子授かりに効き目があると信じられており、子供のない女性が触りにきてお供えを置いて帰る。人目のない時に跨(また)がるらしい。インドネシア人の信心深さの表れである金属信仰(→701)の実例であろう。

一時は町の中心も寂れて場末になっていたが、ファタヒラ公園として整備された。近辺には VOC 時代の教会やスパイス倉庫を転用した博物館が開設され、ジャカルタの観光スポットになっている。

１５５．運河の風景

ジャカルタの起源はスンダ･クラパという港であるが、現在のジャカルタの新港は東のタンジュン･プリオクにある。スンダ･クラパは旧港として内航船、漁船が利用する港である。旧港には外島からのピニシ船(→854)が舳先を並べ物資の荷役を行っている傍らに元スパイス倉庫を利用した海洋博物館がある。

近辺で活気を呈しているのは海に接するパサル･イカン（PasarIkan=魚市場の意味）である。魚に限らず生鮮食品市場[2]である。魚好きの日本人が買い出しに出かけるが、暑いので魚も腐りやすく臭いに辟易(へきえき)したとのことである。

東インド会社（VOC）時代のバタビアの市街は要塞の外へ拡大しチリウン（Ciliwung）川の両岸に市街地を形成していた。町の周囲は堀と城壁と倉庫でとり囲まれており、石の土台に築かれた城壁や倉庫の一部が今日も夏草の中に残っている、というよりは放置されている。

ところでジャカルタには石を産出しない。町を築いた石は船のバラストとしてインドから輸送されたものである。ジャカルタでは石は貴重品である。今日では石塀はなくなっているが、掘り割りによってその跡を辿ることができる。石塀の内側はコタである。

オランダ橋遠景
2011/12/11 編者撮影

オランダ人は祖国と同じ都市様式をバタビアに持ち込み、オランダの都市計画に従い、町には水路を張り巡らした。ゴッホの絵で馴染(なじ)みのオランダ式“跳ね橋”が今もなお堀にかかっている。写真で見るとヨーロッパもジャカルタも区別できないが、気温は言わずもがな熱帯の暑さである。ジャカルタの運河の水は黒く、メタンガスの泡を噴出している。橋も保存のみで実用には供されていない。

[2] ジャカルタの魚市場は日本の ODA 資金によって近代化された。

運河に臨む古いレンガ造りの建物はアンネの隠れ家のあるアムステルダムの風景である。建物の一つの元教会はワヤン博物館に転用されている。

オランダはアムステルダムと同じようにバタビアの防衛と物資の輸送のため運河を掘削し、町の隅々にまで巡らした。しかしオランダ人の建設した熱帯の都市水路には重大な欠陥があった。スコールの激しい雨は水路に土砂を堆積させた。上流からも海からも土砂が運ばれ、運河は埋まりゴミであふれた。その要因には 1699 年のサラク山(→114)の爆発と郊外での砂糖栽培のため森林が伐採されたこともあろう。

雨期になると町は水害に見舞われた。乾期になると淀んだ水が悪臭を放ち疫病の原因となった。住民は窓を閉め切って空気が室内に入らぬようにした。衛生知識のない当時、海からの微風が病の原因であるとされ、風が吹くと窓を閉め切って屋内に逼塞(ひっそく)した。

堀に囲まれたコタの地図を見ていると長崎の“出島”を思い出した。VOC の古文書には出島が VOC の“領地”であるがごとく記載されているそうだ。日本は堀で切り離した出島に外国人を隔離したつもりであるが、オランダは防御のための領地として出島を与えられていることに満足していたのでないだろうか。

１５６．コタ/旧市街地

チリウン河口の港にオタンダ東インド会社VOCのバタビア商館とそれを取り巻いて市街地が形成された。この市街地は「コタ（Kota）」と言われる。インドネシア語のコタとは“町”の意味であるが、ジャカルタではバタビア時代からの旧市街地をさす固有名詞である。

バタビアは VOC(→272)の交易の拠点であると同時に防衛の砦であった。しばしばライバルの英国やバンテン王国(→261)から攻撃された。最大の危機は 1628 年、29 年と 2 回のスルタン・アグン(→337)の率いるマタラム王国の兵 20 万人の包囲であったが、VOC は防御に成功しバタビアは VOC の本拠地となった。

１７世紀後半から１８世紀にかけてバタビアの人口は増加しその繁栄は《東洋の女王》といわれたが、一方では《東洋の墓場》とまでいわれた。

当初のコタにはオランダ人に以外にインドやアフリカなど遠方から連れてきた家事使用人の奴隷や傭兵の日本人(→345)などがいた。VOC は地元住民のジャワ人やスンダ人は地元の王国に通じると警戒したが、地元住民でない外国人の居住は容認した。

華僑はバタビアの建設当時から移住してきて滞在していたが、人数が増えるとヨーロッパ人でない華僑は不気味な存在になり、紅河事件[3](→667)を機会にオランダは華僑を石塀で囲ったコタの外のグロドックへ追い出した。

解放奴隷は郊外にカンプン(→728)を作って定着し地元住民と混血しブタゥイ人(→690)といわれる集団を形成するようになった。ブタゥイ人は都市近郊の園芸農家として生計をたて、独特の文化を形成するようになった。

[3] 別名「バタビアの狂暴」「アンケの悲劇」Geger Pacinan

バタビアが発展し 2 万人が居住するようになるとコタは狭く飲料水が不足し、余りにも住みにくかった。オランダ人自身も健康のために週末の別荘を町の外に設け、次第に居住地をコタの外に求めるようになった。

バンテン王国は滅び、マタラム王国は骨抜きになり、VOC の威光はジャワ全土に轟き、地元勢力を恐れる必要がなくなった。防御のための石塀は取り払われてコタの市街地は南に連続するようになった。

VOC の発展に伴いヨーロッパ人も増えた。特に家族連れは仕事はコタで行うが、居住地は郊外に求めるようになりコタの南郊外が開発された。

総督ダーンデルス[4]は東インド政庁の所在地の移転を計画し、1809 年にコタから南方 10km の内陸部の現在のムルデカ広場周辺であるウエルトゥフレーデン（Weltevreden）に移した。その際に旧バタビアの城塞、城壁のほとんどは取り壊され、多くの運河は埋められた。

コタは一昔前の繁栄の有様がうかがえるだけに現在の寂れ様が対照的である。大阪の川口町、東京の明石町の雰囲気に似たものといえよう。白人が流出し空洞化したコタは華僑の居住地となり、さらに貧しい人が流入し今日のコタは庶民の町である。グロドックと一体になったチャイナタウン(→674)を形成している。

１５７．グロドック地区

1740 年の紅河事件(→667)以降、華僑（中国人）の居留地域としてコタの石塀の外の南側に割り当てられた地域がグロドック（Glodok）である。中国人は全てグロドックに移された。現在、グロドックからパンチョラン（Panchoran）にかけてチャイナタウンを形成しており、インドネシア商品流通のハブである。

オランダが行った異民族支配の手法は間接統治である。人望のある者をカピタン（英語のキャプテンと同じ語源）にして自治に任せるという方法である。従ってグロドックでは中国人はあたかも中国であるかのごとく振る舞い、町の様相も中国と同じであった。これがチャイナタウンといわれるものである。

華僑が続々やってきてチャイナタウンは自ずとその都市の中心商業地域となる。為政者がチャイナタウンを割り当てた理由は商業地域の振興のためではない、厄介(やっかい)なものを切り離して別管理するというヨーロッパのユダヤ人のためのゲットーと同じ発想である。

南へ南へと拡大するジャカルタではグロドックの南に新市街が形成されたため、かつてのコタの石塀の南の外であったグロドックも今日のジャカルタ地図で見るとはるか北の方に位置している。

今日のグロドックはジャカルタの代表的チャイナタウンで商店の並ぶ商業地域である。電気器具店が軒を並べていることからインドネシアの“秋葉原”といわれる。しかし東南アジアの他国のチャイナタウンとは何かが異なる。それは漢字の看板がないことである。

---

[4] ナポレオン戦争でオランダはフランスの支配下に入った。オランダ愛国党の指導者としてナポレオンの覚えのめでたかったダーンデルス（Daendels 1762-1818）がオランダ領東インド総督に派遣された。英国のラッフルズのジャワ占領により罷免されるまで在位（1808-11）は短かったがジャワ島の道路網、新都市建設の大規模の土木工事を行った。新都心を内陸部に移したのは英国の艦船による襲撃を恐れたからである。

インドネシアでは漢字は厳禁であった。漢字の看板が禁じられているためローマ字の日本の電気・自動車・写真メーカーの看板が目につく。漢字がなくてもここがチャイナタウンであることが解るのはショップハウスの(→798)という店の造りである。

一階が店、二階が住居で頑丈(がんじょう)そうな間口のせまい家が櫛(くし)の目のように軒を並べている。百年の歴史をへて汚れているものでも作りは頑丈である。華僑排斥の嵐が荒れ狂った際は表の鎧戸(よろいど)を硬く閉ざし息を潜めて時をやり過ごした。1998 年 5 月の政変時にまたもやグロドックは暴徒に襲われ、放火や投石の被害を受けた。

チャイナタウンを訪れた人の見聞によると一階の商店は薄暗く陰気な感じでさして儲かっている様子もない。しかし二階へ上がると冷房の完備された明るい部屋にパソコンやファックスなど最新鋭のオフィス機器が備え付けてあり活気があった。目立たないことは華人（中国系インドネシア人）が異国で生き抜くための生活の知恵である。

昔はグロドックの一角に中国大使館があった。9 月 30 日事件(→384)を契機とする反共産党暴動の中で群衆によって焼き討ちにされた。焼けたままの姿で 20 年以上、放置されていた。両国の国交回復後、中国は旧地での大使館を希望したが、インドネシアは拒否した。

看板に漢字の文字はなく、ショップハウスは次々と取り壊されている。しかし、中国系住民がいる限りグロドックは商業の“中心（センターの中国語）”であることは間違いない。

⇒674.チャイナタウン

１５８．ムルデカ広場

首都ジャカルタの中央に「ムルデカ（Merdeka=独立）広場」という大きな広場がある。北京の天安門広場、東京の皇居前広場と同様に国の象徴でもある。この広場周辺に陣取っていたオランダ東インド政庁の統治機関の建物は、共和国の中央官庁となり官庁街を形成している。植民地時代にオランダによって街を南に拡大する際に、当初から公園のため計画的に留保された区画である。

人家が一杯のジャカルタの街の中での唯一のオープン・スペースであり、早朝にはジョギングをする人もみかける。2002 年 10 月より広場は鉄条網で取り囲まれた。カキリマ(→858)を締め出し美観を保つためである。

時は 1945 年 9 月 19 日、インドネシアが独立宣言を発して 1 ケ月後、独立集会のため全国からムルデカ広場（当時はイカダ広場[5]といわれた）に集ってきた民衆は 10 万人を越えた。連合軍から治安責任を負わされた日本軍はこの集会を禁止したため、集まった民衆は一触即発の興奮状態であった。この時のスカルノ大統領の演説は短かったが、祖国愛を訴える切実な呼び掛けであった。この熱弁によって広場を埋めた群衆を無事に解散させインドネシア国民がスカルノ大統領の下に秩序を保っていることを内外に顕示した。

その後は民衆を動員する行事はスナヤン競技場で行われるようになり、広場は公園となった。その一角はジャカルタ・フェアの会場（クマヨランに移転移転）や遊園地もありジャカルタ市民の集う場

[5] 当初はガンビル広場と呼ばれたが、オランダ時代にコーニングスプレイン広場に改名された。日本の占領でイカタン広場になった。イカダは Ikatan Atlet Djakarta（ジャカルタ体操連盟）のシンカタンである。日本占領時代は軍政当局によって体操が奨励され、この広場に毎朝大勢の人が集まって体操をした。⇒加納啓良「インドネシアを齧る」、ジャカルタ新旧HP

所である。

独立広場とモナス
2011/2/23 編者撮影

ムルデカ広場にそびえたつ「独立記念塔（モナス MONAS＝Monument Nasional の略）」はどこからでも見えるランドマーク[6]で首都ジャカルタのシンボルである。塔そのものはヒンドゥー哲学をデザイン化したものであり、138m の頂上の炎に見える光った部分には 35kg の金が使われている。着工はスカルノ大統領の時代であるが、14 年の工期をへて完成したのは 1975 年でスカルノの死後である。スカルノ元大統領の人気のない頃にはスカルノのチンポコとあだ名があった。

塔の上から数多くの近代ビルを見下ろすことができる。その隙間に赤黒い瓦の屋根の民家がギッシリと並んでおり、たまにある突出した建物はモスクらしい。南は遠くにサラク山、グデ山の山並である。北はタンジュン･プリオク(→167)の港である。その向こうのジャワ海は霞んでしか見えない。湿気の多い熱帯の気候か、あるいは急速に増えた自動車の排気ガスのせいである。

塔の下はインドネシアの歴史の流れを示すパネルが展示してある。独立宣言文(→318)、国旗(→296)、国章(→367)の“３種の神器”が収蔵されている。

モナスの高さを超えてならないという建築基準も 1995 年に廃止された。クマヨラン空港跡地の再開発として世界一の高さになる 558m の超高層ビルのジャカルタ･タワーが工事中である。

１５９．国立博物館

大統領官邸の近くのにある「国立博物館（MuseumNasional）」の前身は 1868 年に完成した王立バタビア芸術協会である。植民地時代からインドネシア全土の民族の文物の展示を行っていたが、独立後、国立博物館になった。

国立博物館　正門　Wikipedia から

正面玄関の間口の割りに奥行きがあり、インドネシア最大の博物館である。タイから贈られた象の石像が目印である。象(→068)はインド文化圏では学問の神様である。文殊菩薩は象に乗っておられる。

インドネシア各地のあらゆる分野にまたがる文化遺産が展示されている。仏像がパレンバン(→101)、ジャンビ(→100)やクラテン(→128)と発掘地名だけつけて展示してある。何かいわくありげであるが、冷房のない旧時代の建物では長居はできない。

陶磁器の収集はオランダ人の陶磁器研究家オルソイ・デ･フリーネスの収集を引き継いたものである。中国製に混じり伊万里もある。収集品が多すぎて整理ができない、といわんばかりに積むように無造作に展示してあり埃（ほこり）が気になる。とにかくメンテナンスの苦手な国民の博物館である。

[6] インドネシア各地への距離はモナスが基点になっている。クマヨラン飛行場跡地に世界最高 588m の塔を建てる計画がある。4 億ドルの予算で 2009 年完成であるが、経済危機で工事中断になっている。

陶磁器は香料を保管する実用品でもあり、熱帯の物産と引換に多くの陶磁器がインドネシアに持ち込まれた。中国製陶磁器は VOC(→272)の有力なヨーロッパ向けの輸出品であり、バタビアがその中継地であった。ジャワ王室を初め外島のスルタンにとって富と権威のシンボルが中国の陶磁器であった。熱帯では冷たい陶器肌は一種の信仰の対象(→703)である。

冷房があり警戒も厳重なのはクリス(→702)の展示室である。黄金に宝石のついたクリスがあり、人もそこだけ多かった。なんでもかんでも首都に集めたが、平日の東京国立博物館と同じくらい観客も少ない。各州の博物館を充実させる方針ときいた。

博物館より面白いのはメンテン地区にある「スラバヤ通（Jl. Surabaya）」の骨董街である。“泥棒市”とも言われるようにかつては雑然としていたが、今では間口２㍍、奥行き４㍍の骨董品店が百軒以上整然と並ぶ。

商品はインドネシア各地の文化遺産、民芸品などに加えて、西洋舶来家具、中国陶磁器などの骨董品である。植民地時代のヨーロッパ人の贅沢(ぜいたく)とはヨーロッパから家具を取り寄せ、大勢の召使にかし付かれることであった。インドネシアが独立した際にオランダ人は引き上げてこれらの高級家具が残された。

過去においてインドネシアの土地が産出する香料や砂糖などの産物は世界の奢侈品をインドネシアへ引き寄せた。その残映がスラバヤ通であろう。しかし今では骨董品と称するものはほとんど偽物ということである。

思いがけない面白いものはニューギニア高地部族(→627)の“石斧”などの石器である。ニューギニア島山中は現在も石器時代にあり、そこでは石斧が使用されている。使い込んだ形跡の“現役”の道具に骨董品価値を感じる。

１６０．タムリン通

首都ジャカルタのムルデカ広場の西通りから南に向うジャカルタの顔であり背骨ともいうべきメイン･ストリートは「タムリン通（Jl. M.H.Thamrin）」である。その命名の由来であるタムリン(→294)は独立前に横死した穏健派民族主義者である。

タムリン通の片側５車線は小分離帯で３車線と２車線となっている。合計 10 車線を車が行き交う様は写真で見る限りは先進国と何ら変わる所はない。しかし走っている車の中にはオンボロで黒煙をあげているものもおり､排気ガスの臭いがひどい｡交差点の交通警官も大きなマスクをつけている。

窓ガラスのないオンボロバスは庶民の乗り物である。空調付きのバスは都市中間層の乗り物である。エリート層や外国人駐在員は運転手付乗用車に乗る。社会階層で交通手段は分かれている。

横断歩道はなく人の横断のためには専ら陸橋である。車からはよく見えないが陸橋の上でも物売りや乞食で混み合っており、通り抜けるのは大変なことらしい。

主要交差点はロータ－リー方式になっており、中央には花壇に囲まれた大きな噴水がある。そびえている立派な彫像は歓迎の塔である。８頭立ての馬車を御すアルジュナ神(→948)の像もある。

今、このタムリン通りの両側には、銀行の本店、主要なホテル、中央官庁、大使館、国営百貨店がある。日本大使館、日本の大企業の事務所や現地法人のあるヌサンタラビルもタムリン通りにある。

植民地政庁の建物がそのまま官庁として使用されている。

タムリン通は独立後、スカルノ大統領によって完成された。そもそも同大統領はＩＴＢ(→108)建築学科の出身であり、新独立国の意気を示すため首都ジャカルタの都市計画作りにことのほか熱心であった。

ホテル・道路・記念碑等の見栄のため貴重な外貨は浪費され、物価高で苦しむ国民のひもじさの不満が高じてスカルノ大統領失脚の原因となった。

タムリン通の南に連なるスディルマン通はブロックＭに通じる。スディルマン通ができた当時、道路の下はカンプン(→728)が密集していた。盛土の道路はスコールの際に道路が水没しないように雨水はカンプンに流れる仕組みであり、外国人の賓客が往来するメインストリートからカンプンが見えないように目隠しの塀が続いていた。

今、そのカンプンの跡地にビルが続々と竣工し、２０階を越える現代風の高層ビルが林立している。ピカピカの新しいビルはインドネシアの経済活力のシンボルであったが、通貨危機が起きるとバブルの象徴となった。不思議なことは 1997 年の経済危機後もビルの建築が続いている。

電車・地下鉄の大量輸送交通手段のないジャカルタではタムリン通⇒スディルマン通の幹線も車が多くなりすぎてラッシュアワーはもちろん、常時、交通渋滞(→838)が生じるようになり、通勤時には“３in１(→876)”の規制が行われている。

１６１．メンテン地区

植民地時代に今のムルデカ広場の周りにオランダ人の住宅地として開発された「メンテン（Menteng）地区」は緑が多くの高級住宅地である。コロニアル風邸宅(→796)のたたずまいも残っている。メンテンはかつての土地所有者の名前にちなむ。大統領や政府要人の私邸、各国大使の公邸、事業家の豪邸が並んでいる。

メンテン地区にインドネシア独立宣言(→318)記念公園がある。独立宣言の発せられたスカルノ邸は太平洋戦争の際に占領した日本がオランダ人の邸宅を没収して貸し与えたものである。東プガンサアン通りはプロクラマシ通（Proklamasi-宣言の意味）に改名された。

独立宣言を読み上げるスカルノとハッタの二人のかなり大きい彫像と独立宣言のレリーフがある。1980 年 8 月 17 日に序幕式が行われた。どこへ行っても人が溢れているインドネシアであるが、高級住宅の中のこの公園はほとんど人が見えず森閑としていたのが印象的であった。独立宣言の起草された前田精武官邸(→355)は独立宣言起草記念館として保存されている。

メンテン街の一角のチェンダナ（Cendana）通りに前スハルト大統領とその一族の住居がある。大統領は昼は官邸で仕事をしたが、夜は私邸へ引き上げた。巷(ちまた)では官邸に現れるスカルノの幽霊を恐れているからだと噂された。

スハルト大統領は末期の経済危機対応の IMF や米国の勧告をないがしろにするため、1998 年 3 月、日本から橋本龍太郎首相が私邸を訪れて宥(なだ)めすかしたことがある。記者会見がスハルト邸宅の庭で行われたため日本の記者も邸へ入ることが許された。その話によれば木彫りや鳥かごが目立ち、牡(おん)鶏(どり)の声もしたそうである。

敷地は広いが家は古い二階建てで豪邸というほどではないらしい。白い柵で通りから隔てられており、前庭が広く、警備隊の詰め所があった。

スハルト私邸は裏口で長女トゥトゥットの家と繋がっている。通りの向い側に次女の家がある。その他の子供の家も近くである。スハルト退任後、三男のトミーを汚職容疑で逮捕しようと彼の家を取り囲んだが簡単に逃げられた。一族の邸宅は地下通路で繋がっているらしい。

チュコン(→491)として悪名高いリム・シウリョン(→523)の家も近所にある。リムはスハルト大統領もさることながらティエン夫人に取り入るのがうまかった。リム叔父さんはスハルトの息子が遊びに行くと持ちきれない程の札束を握らせた。

密かに囁かれた“チュンダナ”とはスハルト一族と特定のチュコンを意味する隠語であり、「バックにチュンダナがいる」と囁かれる時は利権などろくでもないことであった。

現職当時は交通規制があったわけでないが、一般の車も近寄らなかった。どんな因縁をつけられるか分からないからである。デモ隊も厳重な警戒に恐れをなしてチュンダナへは近づかなかったが、退任後は不正蓄財を非難するデモ隊が押し寄せた。

１６２．黄金の三角地域

ジャカルタの都心はタムリン通り⇒スディルマン通沿いに南下している。かつてはジャカルタの南郊であったスナヤン（Senayan）競技場周辺には国会議事堂や国際会議場、高級ホテルや高級コンドミニアムがある

スディルマン通、ガトット・スブロト通(→344)、ラスナサイド（Rasuna Said）通(クニンガン通)には近代高層ビルが軒を連ねている。この三通に囲まれた約 4km 四方の三角地域に主要オフィスの 2/3 が集中しており、“ゴールデン・トライアングル（黄金の三角地帯）”といわれる今日のインドネシア経済の中心地である。

クリスモン(→480)以前のインドネシアは景気にわいた。海外からは気前よく貸してくれるのでインドネシアの企業家は金を借りまくった。何に使ってよいか分からない金でとりあえずビルを次々に建てまくった。多くは銀行の本店ビルであった。

1980 年代は道路だけ先行していたが、何時の間にか周りのカンプンは取り払われ高層ビルが林立した。町の変貌の早さは東京をも上回る速度である。

スディルマン通とガトット・スブロト通の各々10 車線の道路幹線がトランペット型で立体交差するスマンギ（Semanggi）交差点は先進国の光景である。スマンギ交差点はジャカルタの最重要の交通の要衝であり、国会が近いためパーフォマンス効果が大きい。近辺に大学が多いことから学生デモの集結地になった。

ハビビ大統領当時、学生デモが交差点を占拠しジャカルタの交通が麻痺(まひ)したことから、実弾が発射されデモの学生が死亡する、いわゆるスマンギ事件が 1998 年 11 月、1999 年 9 月の二度もあった。半年前のトリサクティ大学の学生デモ射殺(→403)事件では世論は挙って学生を支持し、世界中からの応援団もあってスハルト大統領辞任へ押しやる原動力となった。しかしスマンギ事件は学生側のやりすぎも世論の批判をあびるようになった。

交差点に近いスナヤン（Senayan）競技場はスカルノ大統領によってインドネシアの威信をかけ、ソ連の援助で建設された。現在も競技場として４年に一度定例の国民体育大会が催される他、ロックコンサートなど大人数を集める催しに使用される。

何れにせよ十万人以上を収容する立派な設備はスポーツ大会よりも政党の大集会のような他の用途で活用されている。スハルト体制崩壊後は政党の自由化により各政党はスナヤン競技場へ動員をかけて勢力を誇示した。

演説が好きでありしかも巧みであったスカルノ大統領当時は独立記念日の８月 17 日にはスナヤン競技場の 10 万人の大観衆を前に熱弁をふるった。かつての民族を奮い立たせた演説(→974)も晩年になると資本主義国を罵倒するだけの品位のないものになり、ついには国民に飽きられた時、スカルノの失脚が始まっていた。

ワヒド大統領によってスナヤン競技場はスカルノ大統領にちなみブン･カルノ（BungKarno）競技場と改名された。

１６３．ブロックＭ

ジャカルタ市内を南北に貫くタムリン通からスディルマン通に連なる幹線はクバヨラン･バル（Kebayoran Baru）に通じている。クバヨラン･バルのランドマークは交差点に聳える青年の像である。通称“ピザマン”と言われる命名の由来は像を見れば一目瞭然（いちもくりょうぜん）である。プルタミナ社(→531)の寄贈であるが、青年の顔が当時のプルタミナのストウォ総裁とそっくりであることで有名である。

「ブロック（Blok）M」とは、都市計画に従いクバヨラン･バル地域をＡ、Ｂ、Ｃ・・・と順番にブロックに区切っていたころの名残でブロックMは開発当初から中心地であった。まわりはクバヨラン･バルの高級住宅街である。

裕福な高級官僚や高級軍人、中国系ビジネスオーナー、外国企業の経営者の優雅な邸宅が並ぶ。大使館公邸を始め、日本人駐在員の住居の大半はこの地域にある。

ブロックMはバス・ターミナルを中心にパサラヤ（Pasaraya）という国営百貨店や大規模なショッピング街がある。今日では副都心に発展し、商業のみならず文化発進基地となっている。ブロックMは新宿・渋谷に相当する。

ルプス（Lupus）といわれるポップ小説の舞台がブロックMであり、新しい風俗や流行の発信地である。ルプスは小説の主人公の名前である。若くて背が高い少しハンサムな高校生は現代の風俗を象徴する。シリーズで 10 冊以上出版されている。

最近ではさらに南のクマン（Kemang）が人気を集めている。クマンは「野生のマンゴ」という意味でかつて果樹園であった名残である。西洋風のレストランやカフェが軒を並べ外国人が多い。日本人はジャカルタの“青山”といっている。

ブロックMはジャカルタの歓楽街である。しかしタイのバンコックのタニヤほどひどくはない。何故ならインドネシアはイスラム教徒が人口の９割を占めるイスラム国である。

それでもイスラム過激派にとってブロックMは許されざる堕落の街である。派手なネオンであまりに目立つとイスラム何とかやらを名乗る白装束の連中が押しかけて店を壊す。押しかけてこないように日頃から冥加金を納める手もあるらしいが、国民宗教を嵩（かさ）にきた大義名分とヤクザ・暴力団は

紙一重の差である。

特にラマダン(→812)中でイスラム教徒が真面目に断食を行っている際に異教徒の不謹慎が目に余ると爆弾騒ぎも起きかねないので営業は自粛している。

日本人向けの飲み屋、カラオケもブロックMに集中している。駐在員が夜な夜な出没しカラオケ⇒スナック⇒ディスコのフルコースを消化し未明にご帰還という、良い時代はいずこも同じで昔話になりつつある。

それでもやたらにその筋のオネイサンが多く、彼女らは知っている限りの日本語を駆使して近づいてくる。オネイサンとの駆け引きの実践で覚えたインドネシア語に強い人を“M大学卒”という。博学の S.T 氏[7]によれば「外国語の習得速度はその動機の不純さに比例する」という普遍的法則があるそうだ。

１６４．ＴＭＩＩ公園

TMII（Taman Mini Indonesia Indah＝美しいミニ･インドネシア公園）はジャカルタの郊外の南東部にある 120ha の敷地を有する公園である。中央の大きな池にある島はロープウェイから見るとインドネシアの島々を型取っている。

各地方の民族色の濃い伝統建築を移してきた 27 州のパビリオンが池を取り囲む。日本でも見られる民家村であるが、インドネシアの場合はスケールも大きく、多様性に富んでいる。インドネシアは“多様性の中の統一”をスローガンとしているように多民族からなる多様性を誇る。TMII は手っ取り早いインドネシア一周の旅行気分になれる場である。

公園内には交通、軍事、切手など各種の博物館、数種の植物園がある。巨大な鳥のケージには熱帯の色鮮やかな鳥が一杯である。極楽鳥(→076)もいて、係員が招くと客の肩に止まる。この場合は当然のこととしてチップが期待されている。小中学生の勉強のための資源や科学のパビリオンもある。

外国人にはインドネシア各地の伝統文化の品を収集したインドネシア博物館が好評である。ジャカルタ市内の古色蒼然の国立博物館(→159)に対して、こちらは新しい施設で展示方法も近代的である。何より冷房のあることがありがたい。

TMII 建設の動機はスハルト大統領ティエン夫人(→451)がアメリカのディズニーランドを見て感銘を受けたという。そこで同じようなものをインドネシアに作りたいと言いだし、1971 年大統領夫人の事業として始まり 1975 年に開園した。

資金集めは任意の寄付に基づくことになっていた。実態は公共工事に関与すると夫人の管轄する財団から寄付の依頼がある。そのうち寄付を予め明らかにすることが公共工事を受注の条件になる。農地の買上げ価格が低い等々・・・・。

予算は 105 億ルピア（約 88 億円）であるから不要不急の遊園地として有識者や学生からの厳しい批判があったが、政府の威信と国家の安寧を傷つけるものとして弾圧された。以降のスハルト体制のパターンである。

しかし出来上がってみると評判はまずまずである。インドネシア自体の国力が上がり、丁度このよ

[7] 〈編者註〉編者のことである。

うな文化施設を欲する時期になっていたということであろう。入場料は家族連れにとってはかなりの負担であるが、憩いの場として定着しているようである。各州のパビリオンにインドネシア人が多いのは外島出身の都市中間層(→734)の夫婦が故郷へ帰る代わりに子供に故郷を説明しているのだろうか。

TMII 公園に隣接してスハルト博物館[8]がある。展示品はスハルト大統領に由縁のあるもので、9 月 30 日事件(→450)当時にスハルト将軍が着用していた軍服やヘルメット等である。誕生以来の個人史がレリーフになっている。

スハルト一家の写真や海外国賓の贈り物が山とあり、スハルト王朝の開闢(かいびゃく)を誇示するものであった。入場料金 2000 ルピアを払って不愉快になる仕組みである。まだ開館しているだろうか。

１６５．ルバン・ブアヤ村

ジャワ農村の農家は屋敷林(→059)の木立にすっぽりと囲まれており、後からできた高速道路からだとそこに人家があるとは見えない。1965 年の 9 月 30 日事件の舞台となったルバン・ブアヤ（Lubang Buaya）村もこのような農村の一つでジャカルタから車で数十分の南東の郊外にある。

そこが空軍のハリム（Halim）基地[9]に隣接していることは 9 月 30 日事件と共産党(→381)の影響の強かった当時の空軍の関係を示すものである。

そもそもルバン・ブアヤ村は共産党の拠点として軍事訓練のためインドネシア全国から青年党員が集まる拠点であった。当時のインドネシアでは村長以下、共産党の支配する村があったが、ルバン・ブアヤ村もその一つであった。

10 月 5 日の陸軍記念日に共産党追放の軍側のクーデターがあると信じた共産党の軍兵士が“先手必勝”とばかり 10 月 1 日未明、陸軍幹部の自宅を襲った。日時は正確には 10 月 1 日であるが、クーデター側が 9 月 30 日蜂起計画と称していたのに従って 9 月 30 日事件といわれる。

間一髪の差で逃れた国軍の最高幹部のナスティオン将軍(→448)を除き、将軍達はクーデター側の拠点のルバン・ブアヤ村へ連れてこられて処刑された。死体は残酷にもさらに切り刻まれて井戸へ投げ込まれてバナナの葉で覆い隠された。

襲撃が成功したにもかかわらずこのクーデターのお粗末なところは、襲撃のリストにもなかったスハルト将軍(→450)によって 10 月 1 日中に全権力が掌握され、クーデターは失敗に終わったことである。

10 月 3 日に将軍達の痛ましい遺体が発見され、共産党の非道ぶりが TV などでセンセーショナル

---

[8] スハルト博物館の正式の名は「Museum Purna Bhakti Pertiwi」である。「母国へ完全に忠誠の博物館」の意味（サンスクリット語）である。

[9] 9 月 30 日事件の際にハリム空軍基地がクーデター側の作戦本部になっていた。空軍司令官オマル・ダニ（Omar Dhani）将軍は共産党のクーデター計画をサポートした。インドネシア軍部のヒエラルキーにおいて後発の空軍は陸軍に対して敵愾心をもっていた。スカルノ大統領は空軍を贔屓してソ連製のジェット戦闘機を買い与え、陸軍を牽制した。
共産党はダニ将軍をスカルノ大統領の後継者と持ち上げ、味方に取り込んだ。ダニ将軍は陸軍との権力闘争でクーデターに加わったものであろう。ハリム基地には陸軍のスパルジョ（Suparjo）将軍がいてクーデターに参画していた。スパルジョ将軍はカリマンタン島の司令官であったが、陸軍上層部には無断でジャカルタに戻っていた。10 月 1 日の朝、スカルノ大統領はハリム基地に身を寄せて、ダニ将軍とスパルジョからクーデターの報告を受けた。
⇒ John Hughes“The end of SUKARNO”

に公開された。その辺の手際が良すぎて作為かといわれるほどであるが、世論の同情のもとに棺(ひつぎ)が載せられた戦車が行進する異様な葬儀が行われた。

これを機会にそれまでのスカルノ体制下の共産党と軍のナサコム(→380)の勢力バランスは一挙に崩れ、共産党に対する欝積(うつせき)していた国民の憎悪が燃え上がり、その結果、その後の数カ月にわたって続く混乱の中でインドネシア共産党は物理的に壊滅した。

今、ルバン・ブアヤ村には共産党に殺害された 6 将軍と 1 人の士官の追悼の像が巨大な国章ガルーダ(→952)の翼の下に雄々しく直立している。1973 年に建設された至聖パンチャシラ(→366)記念碑である。近くには死体の運びこまれた農家と投げこまれた井戸が当時のまま保存されている。古井戸は彫刻付きの屋根で覆われ、周りは大理石が敷き詰められている。大勢のインドネシア人が訪れ、共産党嫌いになる聖所兼観光スポットである。

毎年 10 月 1 日の“パンチャシラの日”はルバン・ブアヤ村はスハルト大統領以下の列席する式典の場となっていた。スハルト体制崩壊後、ハビビ大統領は踏襲したが、メガワティ大統領は 2 年目の 2002 年は欠席した。

⇒384.「9 月 30 日事件」

１６６．トゥグー地区

VOC(→272)がバタビアの町を築いていた頃にマルディジュケル（Mardijkers）といわれるポルトガル系住民が存在した。VOC がマラッカ(→032)やバンダ島(→232)を征服した際に囚人としてバタビアに連れてこられたものらしい。

マルディジュケル[10]は“黒いポルトガル人”といわれるようにポルトガル(→270)がインドやアフリカから連れてきた奴隷が多かった。彼らはカトリックに改宗すると解放され、帽子の着用と街での居住が許された。人数が多かったため彼らを通してポルトガル語やポルトガルの文化が住民に普及していた。

オランダがインドネシア各地から奴隷や従者を連れてくるに従い、バタビアの中ではマルディジュケルはブタウィ人(→690)に吸収されたが、かろうじて「トゥグー（Tugu）」の人々の慣習、衣服、音楽にポルトガル文化を継承している。

トゥグーはタンジュン・プリオク港の南東 3km の地点にある。ジャカルタの東の市街地に含まれるが、バタビア建設当時のトゥグーは川を隔てた郊外の村であった。マルディジュケルの居住地として割当てたものであろう。

長年の年月は周りとの混血を深め、住民の風貌はインドネシア人と見分けはつかない。今日ではポルトガル語も絶え、純粋のポルトガル人はいないが、トゥグーの場合は白人の血統よりキリスト教徒であるかどうかが問題であり、カトリック教徒であればポルトガルにアイデンティティを求める。トゥグーのシンボルは 1747 年に建設されたカトリック教会である。

トゥグーはポルトガル文化をひくクロンチョン(→984)の発祥の地として知られる。同地で伝えられてきた音楽がインドネシアの国民音楽クロンチョンに発展した。トゥグーのクィーコ一家は先祖代々

[10] マルディジュケルと似た意味にスラニ（Serani）という言葉がある。スラニはポルトガル語を話すキリスト教徒改宗者をいうようである。

演奏を引き継いできた。現在の当主は『オルケス･クロンチョン･プサカ･トゥグー』というバンドを率いている。

マレーシアのマラッカ郊外にはポルトガル村がある。トゥグーと同じ由緒の村が観光地として売り出している。トゥグーにはクロンチョンという目玉もあるのだが。

もう一つトゥグーの地名で特記すべきことはジャワ古代史の発見である。中国の史書によれば西暦 425 年に Ho-Lo-Tan 国から中国に使節がきたと記録されている。この国はジャカルタ東隣のブカシ周辺に都があったプルナワルマン王の治めるタルマ王国(→260)とされている。ちなみにバンドゥンからジャワ海へ西部ジャワを縦断して流れるチタルム川(→540)の語源はタルマである。

タルマ王国の存在の証はボゴール近くのチアルトン川の川原の大きな石に南インドのパッラワ文字(→960)と足跡の碑で明かになった。加えてトゥグーで発掘された石碑がタルマ王国の遺跡であることが分かった。「川の改修の竣工で牛 1000 頭が寄贈された」と記されており、現物は国立博物館に収納されている。

１６７．タンジュン・プリオク港

1869 年スエズ運河の開通により世界の海運は大型汽船時代に突入し、スンダ･クラパでは対応できなくなったので東方８キロに新しくタンジュン･プリオク（TanjungPriok）に港が建設(1877-83、第二期 1910-17)され、これによってジャカルタの港は一新した。

多くの日本人にタンジュン･プリオクの名は苦い記憶となっている。戦時中の昭和 19 年(1944)に起きた大朝丸の積荷に火薬爆発で多くの犠牲者を出したが、日本軍は緘口令をひき、事件を闇に葬った。

戦後ではジャワ島に進駐してきた連合軍としてやってきた英国群は港湾の荷役労働に日本人を動員した。商社マンなどの民間人は一転して敗戦国民となり、最底辺のクーリーとしてタンジュン･プリオクでグルカ兵の監視の下に肉体労働にこき使われる（国際法違反である！）という辛酸を嘗めた。

以来、タンジュン･プリオクはジャカルタの港湾地区である。コンテナ基地があり関税保税地域に指定されることにより原材料を輸入して加工して輸出する工場が林立し周辺は工業地域である。

1984 年のスハルト政権時にタンジュン･プリオクでイスラム教徒の青年が商店や車を焼き討ちにする暴動事件があった。治安当局は暴徒に発砲して鎮圧し、少なくとも 30 人が殺された。そもそもタンジュン･プリオクは港湾労働者の町である。そこに住み着いた人には敬虔なイスラム信者であるスンダ人、ブギス人、マドゥラ人の住民が多い。イスラム教徒からスハルト体制への批判が高まった際に、タンジュン･プリオクで騒動が発生した理由はこのような地域事情が背景にある。

タンジュン･プリオク事件は 1974 年のマラリ事件(→390)と併せてスハルト体制への批判に対する当局側の過剰警備であった。今後もジャカルタのイスラム教徒が何か過激な行動を行うならばタンジュン･プリオクはマークされる地域である。

チリウン河口の旧港スンダ･クラパは数百トンの帆船時代のものであるが、内航の港として活用されている。ブギス帆船のピニシ船(→854)はインドネシア近海の輸送の主役であり、今日ではエンジン

が取り付けられ改造された帆船がカリマンタン島からの木材輸送などにまだ現役で活躍している。古い倉庫をバックにピニシ船が並んで係留している有様は絵になる光景である。

タンジュン･プリオクに連なるアンチョル (Ancol) の浜辺はかつてマングローブの茂っていた所である。今日では面積 551ha の広大なレジャーランド“ドゥニア･ファンタジー（ファンタジーの世界)”という行楽地として家族連れで賑わっている。行った人の感想は千里万博以前の日本の私鉄沿線の行楽地の雰囲気であったそうである。

アンチョルにはアリ･サディキン知事(→396)の時代に都市計画実施の費用捻出のため賭博場があったが、1981 年に廃止された。

１６８．都心は南へ

そもそもジャカルタの前身であるバタビアの都市計画はオランダの手によって作りあげられた。コタの街割りは VOC(→272)であり、ムルデカ広場と周辺の官庁街と高級住宅街は植民地政庁によるものである。クバヨラン･バルの新しい都市建設も植民地時代に手掛けられていた。

植民地政庁の都市計画の視野には官庁とヨーロッパ人の住む住宅街だけがあって原住民のための住宅供給は考えられていなかった。従って計画的市街の周辺にはカンプン(→728)が無秩序に発展して、ジャカルタは“世界最大の田舎”といわれた。

スカルノ大統領は独立を達成すると首都ジャカルタの都市計画作りに熱中した。彼は建築工学士であり、それに芸術的才能の持ち主である。スカルノ大統領によって首都の景観は大きく変貌をとげた。

タムリン通の開通、サリナ百貨店、ホテル、ヌサンタラビル、スナヤン競技場、国会議事堂などの建物、主要交差点のモニュメントや噴水などはスカルノ大統領時代に首都を飾るために貴重な外貨が費やされた。

ジャカルタこそ植民地解放に戦う世界の抑圧された民族の灯台であらねばならないという自意識に駆られ、その象徴がジャカルタの空にそびえるモナスといわれる国民記念碑である。経済的貧困にあえぐ独立したばかりのインドネシアにとって不要不急の支出であったことはいうまでもない。スカルノ時代のジャカルタの行政トップには行政的手腕と関係なく、大統領の意を解する芸術家が任命されたらしい。

スカルノ失権後に就任したアリ･サディキン知事(→396)の時代(在任 1966-77 年)にジャカルタはさらに大きく変貌した。タマン･イスマイル･マルズキ(→986)が建設され、芸術の発信基地として文化都市の側面も有するようになった。

都市の肥大化はカンプンの拡大であった。幹線道路の建設とともにカンプン改良計画(→755)をすすめた。先立つものは財源でその確保として賭博場を認めた。一時は市の財政の 1/3 を賄う規模になったという。イスラム教徒にとって賭博は問題(→423)であるが、当時の市民が容認したのは期限付きでその使い方が目に見える形であったからであろう。

アリ･サディキン知事の積極策はスハルト大統領の開発政策によって支援され、石油ブームによる財源に恵まれこともあり 10 車線の幹線道路が建設された。こうしてジャカルタの外見は近代都市に

変貌した。しかし今日のジャカルタは朝夕の幹線道路のすさまじい交通ラッシュに苦しんでいる。これも予想せざる人口の増加である。

スハルト政権の都市開発により多くのオフィスビルやコンドミニアム(→889)が林立し、ジャカルタの様相は近代都市に変身した。チュコン企業(→491)やファミリー企業(→492)は不動産会社を営み、利権としての都市開発には様々な後遺症を残した。

⇒727.肥大する都会

１６９．ジャボタベック

ジャカルタの人口は１７世紀の３万人から 1948 年 117 万人、1970 年 420 万人、1980 年 650 万人、1985 年 783 万人、1995 年で 900 万人と急膨張してきた。大都市への人口の都市集中は全世界の現象であるが、ジャカルタにおいてもその例外ではない。

その中でも首都への集中は東南アジアではバンコック、マニラ、クアラルンプールなどに顕著である。他国と比べるとインドネシアでは地方中心都市が首都に拮抗(きっこう)していたが、近年のジャカルタへの一極集中化現象から２位のスラバヤとの格差は拡大した。

ジャカルタは DKI（Daerah Khusus Ibukota Jakarta 首都ジャカルタ特別州）といわれ、行政では州と同格である。中央・北・西・南・東のジャカルタ５市が DKI の下位になる。面積は 611k ㎡と東京２４区より一割ほど大きい所へ約 1000 万人であるから過密である。

急速な人口の増加に対して都市設備は及ばず、カンプン(→728)を肥大化させている。アリ・サディキン知事(→396)の時代に人口の首都流入を防ぐため閉鎖宣言を行い、ジャカルタ『居住証明書』のないもののジャカルタ居住を禁止した。抑制の効果はあったが、人口増加の阻止はできなかった。

肥大化する首都のために 1973 年ジャカルタ広域都市圏構想いわゆるジャボタベック構想がまとめられた。1976 年にジャボタベック開発委員会が組織され、1980 年にジャボタベック首都圏開発計画が発表された。

ジャボタベック（Jabotabek）とはジャカルタ（Jakarta）に隣接する西部ジャワ州のボゴール（Bogor）県、タンゲラン（Tangeran）県、ブカシ（Bekasi）県のシンカタン(→964)である[11]。ジャカルタの南がボゴール県であり、西がタンゲラン県、東がブカシ県と北の海を除く全ての方向に広がっている。周辺の都市化により実際のジャカルタは市域をこえて拡大し人口 2000 万人といわれる“大ジャカルタ”を形成している。

放射状とループ状の組み合せによる高速道路の建設によってジャボタベックは有機的に一体化された。鉄道も複線電化の改良工事によりボゴール方面だけ郊外型通勤電車も走るようになったが[12]、都心とジャボタベックの交通は基本的に道路だけである。

ボタベック（ジャカルタを除く）では住宅地のみならず工業団地を造成し、外国資本を誘致したことからボタベックでの就業機会が増した。1980 年代以降はジャカルタ都心部の人口増加率が下がり、ドーナツ現象が明らかになった。

後背地のボゴール県は乱開発で森林が伐採された結果、水害の被害がひどくなり、治水面の配慮か

[11] 〈編者註〉2000 年ころからデポッ市を含めてジャボデタベック(jabodetabek)と呼ばれるようになった。
[12] 〈編者註〉東はブカシ、西はランカスビトゥンまで複線化と電化されている。下の図参照。

ジャカルタ首都圏の近郊電車区間 2019 年

ら開発にブレーキがかけられ、開発の主力は西のタンゲラン県、東のブカシ県の方向で、さらに西に接するセラン（Serang）県、東のカラワン（Karawang）県・プルワカルタ（Purwakarta）県が拡大首都圏を形成している。

ジャボタベックの人口は増加し、ジャカルタの発展は限りなく続くかに見えた。しかし 1997 年に始まる経済危機で都市開発計画のいくつかは破綻した。

⇒105.パスンダンの地

著者　**大槻　重之**（おおつきしげゆき）

著者略歴

1938　京都府綾部市に生まれる

1961　大阪大学経済学部卒業

関西電力入社

以降主として燃料業務に従事

1998　関西電力退職後三田市に居住

著書　「燃料が電気をつくる」1972

「インドネシア百科」1991

「バリ島百科」1992

「マレーシア百科」1993

「続・インドネシア百科」1994

「石炭をゆく」1998

インドネシア専科　B地誌編（上巻）

発行日　平成 19（2007）年８月 10 日

著　者　大槻　重之

発行者　大槻　重之